

## 【曲目解説】

ジョアッキーノ・ロッシーニは、1792年2月29日、アドリア海に面した中部イタリアの町ペーザロに生まれ、1868年11月13日、76歳でパリ近郊のパシーに没しました。ホルン奏者の父、歌手の母のもとに生まれたロッシーニは、幼い頃から音楽の手解きを受けていましたが、11歳で作曲を始め、14歳でボローニャ音楽院の入学を許可され、その年には最初のオペラ「デメトリオとポリービオ」を書き上げてしまうという早熟ぶりを発揮します。オペラ作曲家としての本格的なデビューは1810年11月3日に初演された「結婚手形」で、時に18歳、以降37歳までに39のオペラを次々に世に出し、その名声はヨーロッパを席卷しました。「イタリアと音楽世界に君臨するロッシーニ」と評したスタンダールは、その「ロッシーニ伝」を次のように書き出しています。「ナポレオンは死んだが、また別の男が出現して、モスクワでもナポリでも、ロンドンでもウィーンでも、パリでもカルカットでも、連日話題になっている。この男の栄光は、文明の及ぶ境界に制限されるだけである。」と、当時ヨーロッパを吹き荒れた「ロッシーニ旋風」の凄まじさを表現しています。歌劇「絹の梯子」は、初期のファルサ・コミカ（一幕物の笑劇）で、小道具として絹の梯子が、恋人同士の逢引の場面で使われます。

マックス・ブルッフは、1838年1月6日ケルンに生まれ、1920年10月20日ベルリン近郊で没したドイツの作曲家です。彼もやはり早熟の才能を発揮した人物で、11歳で早くも序曲や室内楽を作曲しています。1852年（14歳！）交響曲を書き、同年弦楽四重奏でフランクフルトのモーツァルト財団賞を獲得し、その後4年間ケルンでF. ヒラーに作曲と音楽理論を、ライネッケにピアノを学び、1958年20歳から同地で作曲と教育に携わります。彼の音楽の特徴としては、しばしば民族音楽に取材した、旋律性に富んだロマンティックな響きをもった作品が多いことでしょう。特に合唱曲・歌曲を多数作曲しています。管弦楽の作品としては、ヴァイオリンと管弦楽のための「スコットランド幻想曲」も忘れることはできませんが、何と言っても、今夜演奏する「ヴァイオリン協奏曲第1番」が最も有名であります。管弦楽による短い序奏からソロ・ヴァイオリンの抒情的なカデンツァで印象深く始められるこの協奏曲は、美しい旋律に満ち、またヴァイオリンの魅力を十分に発揮する書法とともに、しっかりした構成感があり、ロマン派ヴァイオリン協奏曲の傑作と言えましょう。

ベートーフェン（1770・12・16?～1827・3・26）の第6交響曲「田園」について何を解説する必要があるでしょう。フランスの作家アンドレ・ジイドの小説だけでなく、「美しいもの」の典型・象徴として人口に膾炙するこの傑作交響曲は、しかし、ベートーフェンの世界観、人生観を色濃く映し出す、実は大変思想性にも富んだ作品であります。今夜は、ここ府中の森、ウィーンホール豊かな響きの中、ベートーフェンの深い想いをじっくりと感じていただきたいと思います。以下に若干のデータを記します。作曲は1807年、ベートーフェン37歳の夏から、翌1808年6月頃まで、ウィーン郊外ハイリゲンシュタットにて完成をみています。初演は、1808年12月22日（木）、アン・デア・ウィーン劇場にて、ベートーフェン自身の指揮で行われました。（この時は、第5番「運命」も初演され、交響曲の番号は逆で、第5「田園」、第6「運命」だったと言われています。）ベートーフェンとしては珍しく、各楽章に標題が付けられ、特に2楽章の最後では、鳥の声が模倣されていて、あたかも、ロマン派で全盛を迎える表題音楽のはしりのように受け取られる面もありますが、それよりもやはり、作曲者の自然観・思想を感じ取るべき交響曲だと言えましょう。